

いました。いつも私は、こわがっていました。アメリカさんにいろいろと話掛けられてですね、私は、主人と一緒にいるよ、子供もいるよ、とわざと子供を仕事場につれてきて見せていました。それから私は、そこで働けば、給料が貰えると思っていました。が、帳簿にサインもしていたのに、なんにもなくただ働きました。


主人は、大山の方で、亡くなったらしいと聞いていましたが、信じられません。だから、防衛隊が捕虜になってくるたびに、訊ねたんです。そして、私の主人は、恩納岳で、わからなくなっているんです。主人はいつも先頭になって、軍服のままでした。ですが、今日までとうとう死体も見つかりません。

### 浦添村(村役所)

星 雅彦

時 一九六九年九月二十四日  
場所 村役所 会議室

氏名	現住所
知念 明 <sup>あき</sup>	
宮城 篤 <sup>あつ</sup>	
喜名 祥 <sup>さむら</sup>	
安和 良 <sup>らう</sup>	
比嘉 正 <sup>まさ</sup>	
嘉正 育 <sup>いく</sup>	



### 解説

安和氏と喜名氏の体験談は、今日からすると当然ながら特異なものにちがいないが、多くの沖縄戦の体験者の中におくと、一種の類型的なものに思われた。

しかし本人たちにすれば、必死の逃避行であったわけで、激しい戦火の中にいたことには変わりなく、そしてその淡淡とした表現の中に微妙な個性が見出される。また、それ以上の特異な体験も同様ではあるが、そこには当時の住民の心があり、さらに沖縄人気質が秘められていると思う。そういう意味と、他と比較し参考できる意味も考え合わせて、あえてここに掲載したのである。

知念明氏はハワイ生まれで、二十一歳までハワイにいて、古里に

定住して五年目に沖縄戦を体験している。それより以前に、九歳のとき沖縄に初めてきて数年滞在し、小学校に通っている。過去の沖縄も熟知している。そうした生い立ちが、沖縄戦でのその行動をほとんど決定的なものにしていたといえるだろう。知念氏は当時四月下旬に捕虜になった後、米軍側の宣撫班となっているのだ。つまり壕の中の避難民を説得し、救い出す役目まわっているのである。その立場の変化、対米への意識、救出作業への苦心のほどが容易に想像できると思う。

それから宮城篤三氏は、敗残兵同様、いつも北部の山中を彷徨していたのだ。北部の山脈の頂上から一本の首里に至る道がむかしからあったということも、話だけでなく宮城氏の体験から、おおよそ確認されたようなものである。それよりも原始人のような生活体験が充分に想像されるのである。ただ、おしむらくは断片的で、表現力が不足していた。そこに執筆の苦心もあった。しかし、山中での生活のほとんどを、フーチバー(ヨモギ)、チイパツバー、ンジャナ、カンダバー、山イチゴ等を食べ、親子八人が移動して行ったという事実は、強烈である。

最後に、浦添村の村役所の職員として、この座談会の、細心な世話役を買って出た比嘉正育氏は、沖縄戦の体験者ではないが、短いながら戦後の廃墟となった村の様子を話されたので、参考までに附記しておいた。

安和 良盛(五十三歳) 県議

私の当山の部落はですね、やっぱり浦添城址の下側になっていま

すので、川添いです、ね、ガマ(洞窟)があって、自然壕の多いところ。自然壕の多いところであり、古墓の多いところ。そこに私、避難してりました。

それは堅固な昔の墓でありました。そこに線香をたいです、戦争の半ばで、どうぞ甚だ済みませんけれども、命を守って下さいと……それから石棺を片一方にかたずけてですね、そこにおったです。そうしておるときにいいよ、四月一日に米軍が上陸したということ。それを聞いたんです。そこでわれわれの古墓の上に、崖をのぼって見たら、米軍が上陸した場合には読谷飛行場あたりから攻撃するだろうと思、私は軍に關係してないもんだから解らんですが、のぼって見たらなんの物音もないです。

それで私はだんだん山づたいに西側の方へ歩いて行ったわけ。今のコココーラー会社あたりまでです。歩いて行って海を見たら、海は船で埋まってしまううしろは見えないです。牧港のずつと沖、読谷岬の方まで全部米軍がおしよせてきているもんだから、ああもうこれでは敗けるんだな、と思いました。それから自分の壕に引返してきたんです。

そこで私はみんなに、これではもう駄目だから、着物も上等の着物を出してつけないさいと言、そして後日の用心にと持っているあの上等の白い肉など、おいしいものから食べなさいと言、家族や親戚のものたちにすすめたんです。そしたらみんなは、びっくりしてですね、食べません。で、私はどんどんたいらげてですね、そうして大詔奉戴日の四月八日にですね、われわれが避難している部

した。そこは昼もロソクを代りばんこに点けた大きな壕でしたが、もつとも安全な場所でした。入口近くには、日本の部隊の壕があったんです。

その壕から離れた海の方に、島尻の人たち二百名余りが避難している壕があって、もし一方だけしかない入口を塞がれたら、出るどころがなくならないって、こつちからと両方の壕から、兵隊から鶴嘴とショベルを借りてきて、掘って、とうとう通したわけです。私らの壕のことをアンマサーガマといっておりました。そこに私らが辿り着いたのは、こんなに沢山の家族だが地形が解らないので、避難する場所を教えてくださいと、兵隊に頼んだら、つれてきてくれたから、大変助かりました。

それから六月二日に、こんどは糸満警察署から、米軍が糸満へ上陸しておるから知念・玉城の方へ行けという命令があったんです。それで私は知念・玉城へ行こうと思、行きかけたら、こんどはまた日本軍の将校連中がどこへ行くかと、知念・玉城、あそこは敵が占領しているのに、なんであそこへ行くかと、すぐスパイだと疑われたわけです。

それで私は東風平から兼城のものとの壕に引返したわけですが、次には地元の人たちも他村の人たちも全部さがって行ったんです。

六月三日に私は遠い親戚をたよって具志頭村の安里へ行ったんです。行ったらあそこは、避難できる壕はない。たった三名ぐらい入るような穴があつちこつちにあるだけで、そこも友軍が使うからとおつぱらわられてしまいました。途中、富盛とみもりの東に何十名もの死人がごろがっていました。また瓦葺の大きな家があったが、私らはそ

落の川べりに、ずらりと日本の迫撃砲が並んでおるわけですが、そのときまで弾一発も撃たないものがその日に、どんどん発砲するんだ。それでそのときには、アメリカのトンボぐわといっていた偵察機が上空から飛んできているし、米軍は宜野湾飛行場まできておるんですが、弾はとんでこないの、この調子なら勝つんだなあ、また意気さかんになったんですがね。

ところが翌九日の夜明け頃から、米軍は迫撃砲の並んでいるところへ、そこばっかりに弾が集中してきた。そして飛行機も低空してどんどん機銃掃射をやるとかですね、は、これは、また大変なことになったと思……。

それから私は、親戚のものと一緒に、さあ南部に下がろうか、どうしようかと毎晩協議したんですがね。そこは米軍の駐屯している宜野湾飛行場の真向うになっておるんで、非常にあの当時は危険なところでした。また日本の迫撃隊は壕の中にもぐりこんで動かす。そこで私らは壕から脱け出して、仲間の部落にあがって、様子を見ていました。そこが激しくなつてから、首里の金城町の方へ避難しました。

それから四月二十八日に警察から、もう浦添城址は陥落された、首里まで来るのは明日あさってだ、で、そんなに沢山の住民を犠牲にするわけにはいかんから、住民はみんな南部へ下がれと、指令官からの命令があつたからと、各壕にふれまわつてきておりました。それで私らは、夕方から夜通しで、南部の兼城村の賀数部落へ、たどって行ったわけです。

賀数の具道の下に自然壕には、百七十名あまりが避難してありま

こには入れず、途方に暮れているとき偶然、当山の私の家に宿泊していた兵隊と出逢い、製糖工場の跡に隠れ場があるよと教えて貰い、砂糖も貰ってから、そこで仕方なく製糖工場のボイラーの下のじめじめした所で一夜をあかしたわけです。

それから真壁村の新垣に戻ったんですが、ますます弾がひどくなつてきて、真壁へ行って、大きなガジマルの下の避難小屋にじっとしていました。昼間、そこで私の家内と従弟は右手を怪我し、私の姉と従弟の妻は直撃弾で即死したもんだから、畑に穴を掘って葬りました。

真壁の避難小屋で、いよいよ捕虜になったのが六月十九日です。

そこには避難民が二十名ぐらいいました。その頃、噂があつて、捕虜になりたいものは裸になって手を上げて出て行けば米軍は殺さないうで助けてくれる、とチラシなんかも配布されてあるということだったが、私はそれは嘘だと思っていました。そのうちに、みんなぞろぞろ出て行くんですね。真壁の前の大通りからアメリカのいる方へ歩いて行くのが、見えるんです。私はそのとき、こんな奴らは、と腹立たしく思いました。

それから私の家内は、私に出て行くと言いましたが、私は残っていたいからお前たちだけ出て行きなさいと、私一人残ったんです。で、一応出て行った家内が、戻ってきて、みんな捕虜収容所に集っているが、あんなだけ残ってどうするか、はやく行くかと誘いに来たわけです。私は避難小屋からどうしても出ないつもりでいました。長男は兵隊の現役だし、将来のことを思い、あとで恥をかきたくなかつたんです。

前に、浦添へ三月三十日に帰ってきました。米軍の上陸は四月一日

でしたから。

それから役所に帰ったけれども、役所としては別に仕事がありませんし、壕の中へみんな閉じこもって、食べるぐらいが関の山でしたから、これではいけないと思つて、経塚の自分の家の裏山の壕に入っていたわけです。

四月二十二、三日頃までいたら、自動小銃の音が聞こえてくるもんですから、ああこれは敵が近くにきていると思つて、出て行つたわけです。

そのとき一緒に逃げるものうち、一人は艦砲の破片が太腿に当たって負傷したもんだから、手当てをするなどして、みんな一日遅れてしまいました。

また途中、あんまり砲弾が激しく飛んでくるもんだから、日本の兵隊に頼んだんです。南に下がるんだが、今は行けないからその墓の中に避難させてくれないかと、頼んだら、やるとききいれてくれたんですが、その代り後の方は見ないでくれて言っていました。そこには爆弾がばい置いてあるんですよ。墓の中に地雷が置いてあるんですよ。それを知らずに、私は朝になったもんだから、その墓には、一日というより半日ですね、我慢して、夕方には早速出て行つたんです。

首里の崎山の下に一週間ぐらいいましたですね。そこへ突然兵隊たちがきて、軍が使うから出るといつて入り込んできてですね。私たちはやむを得んから、すぐには行かれんからちよつとの間だけ置かしてくれと頼んだんですが、兵隊がいうには、天長節を期してです

出て行かなければ、アメリカ兵が射殺するだろう、でも死んでもいい、と私は思っていました。私は頑張つたんですが、家内がなんども出て行こう出て行こうというもんだから、ようやくその気になった。あのときカバンに県会議員の証書やら婿の勲章やら入れてあつたもんだから、見つかつたらまずいと思ひ、カバンをそこへ置くし、それから、浦添の勢理客シツチャクの人から聞いた話では、カマンカマンと出てこいといつて、アメリカ兵は女には親切にして何もしていないでいるが、男の大事な持物は全部取り上げるといふことだつたんで、もし私が死んだときはそこに金を隠してあるよと、みんなに教えて、私はガジマルの根つこの所に穴を掘つて金を埋めておいたんです。そして家族一人一人には五十円ずつ持たせてあつたが、糸満に向かつて捕虜になりに行くとき、途中アメリカ兵から、私と長男と次男の三名が持つているものは案の定、捲き上げられ、空の財布だけを返されたんです。

糸満から私はすぐに具志川村の前原にトラックで送られて、収容されたんですが、あそこに行つて私が心配だつたのは、元村長、元県会議員といった人たちが捕虜になっているかどうか、私一人だつたら大変な恥辱だがと、非常に心配でしたな。しかし当重剛さんが捕虜になっているというのを聞いて、私は安心し、やがて大死するところだつたなと思ひ返しました。

#### 喜 名 祥 介 (三十九歳) 勤労働員係

私は国頭の辺野喜へ疎開者をつれて行つて、そして中断されない

ね、反撃する作戦があるから、そのときには跳ね返すからそれまで我慢してくれなといつてね。結局は、私をなだめているわけですね。そういうわれて、こつちとしては、これはもういけないと思ひましたね。

首里の試験場のところ、ダムのあるあたりは、樹が繁つていて、壕を掘っているのが外からは判らないんですよ。ところが、米軍の飛行機から煙幕のようなものがさあつと二、三回あのあたりにまかれて、あくる日になると、木の葉は全部枯れてなくなつていんですよ。で、どこもかしこも見渡せるようになったんです。それからはずぐ空襲です。黄燐弾をどんどん投下して、そのへん一帯はめちゃめちゃにやられたんです。これじゃここには危険だから早く逃げろというわけで、私らは南部へ逃げて行つたわけです。

私には玉城村に親戚がありましたから、その方を探して行つたんですが、夜道で、道行く人たちもよそもよそものばかりですから、訊いても判らんです。

で、大里村の大城へ行つてみたら、兵隊たちがいるので、道をきこうと思つて近寄つて行つたら、君はスパイじゃないかとすぐ言われたんです。私はこうこういふ事情で道に迷つているもんだと説明したんですが、君は嘘ついているんじゃないかと、信じてくれないんです。私は役場から貰つた鉄砲をかぶっていましたから、軍隊から逃げてきたんだらうといわれたんです。兵隊は懐中電灯をつけて私の鉄砲を見ました。兵隊のものは小さい穴があいているんですが、私ののはあいてなかったもんだから、それでやつと納得されて、

あとで道を教えてくれたんですがね。

それから私らは玉城村の喜良原きらばらへ行つたんです。ウワブという自然壕を探し出して、そこにいました。そこでは軍への協力隊が組まれて、朝、私らは軍馬の草刈りをやらされたり、また弾薬運びを二日間やらされました。

私の家族は、両親と私夫婦と従弟が一人、合計五人でしたが、ずっと無事でした。

ただいつも移動を余儀なくさせられていましたが、ウワブでも、立退き命令が出ました。こつちは軍の作戦上使うところだから、君らはどこかに行きなさいと云つてました。私らの他に土地の者も入っていますからね。軍が使うといつても、それじゃ行く所がないがどこに行くかと迷つていると、兵隊は強制的に追いやるように、東風平か真壁方面へ行きなさいというんですね。ところが、壕を探しに二、三人で出て行つてみたら、すでに玉城村の糸敷の平坦地に米軍がキャンプを張つてあるんですね。たしか六月の初旬だつたと思ひます。

それで、もう行けないからと引返して、もう一つ小さい壕が近所にあるからと土地の人に教えられて、そこへみんな入らうといふことになったんです。そこは這つて入るような壕でしたが、中は蝙蝠が住むような大きい壕でしたから、そこへ板切れを集めて敷いて住めるようにしたんですがね。ところが、子持ちがオシメを外に干したもんだから、やがて米軍に見つかつてしまい、宣撫のビラを投げこまれたんです。それでも誰もこわがって出て行かなかつたんですよ。近所おやげばらの親戚に収容されている私の親戚の縁故のものがき

て、早く出なさい損するが、と声を外からかけていましたが、こっちはあべこべに君はスパイじゃないかと相手にくっつかかたりして、出て行くともしないですよ。ところが後で、捕虜になった六月十二日に、米軍から催涙弾を壕の中に打ち込まれてですね、私は息苦しくなって、また非常にくさくて、眼も痛くなつて、とうとうみんな出て行つたんです。無傷で出て行つたのはいいけれど、あとで男は兵隊じゃないかと、いろいろと調べられて、それには閉口しました。うるさくて仕様がなかったけれども、私はやっと逃れて、当山の部落へ行きました。当山でまたいろいろと検査を受けて、私は三十九歳でしたが、四十五歳以上でなければ兵役はまぬかれませんか、年齢を嘘ついて頑張つて、おし通しました。それがすんだら、馬天港(佐敷村宇津波古)から久志村の東喜(二見の手前)の山につれて行かれました。

東喜で、私はC Pに、年齢が合わないといわれ、くどく調べられてだいたいイジメられました。

後で私は考え、C Pをすると米の配給が一日に五合ずつも貰えるし、いろいろ都合がいいので、それに惹かれて、C Pになつたんです。戦争が終るまで私はキャンプの検問所のガードの仕事をしました。

#### 知念 明(二十六歳) 村役所戸籍係

私は、屋富祖ですが、妻子を内地の方に疎開させておつたもんだから、ずっと役場について当直なんかも引受けておつたわけなんです。

は、どこがどういう状態なのか、島尻方面のことは何も判らないわけですよ。それでも、もし私が下がっておっかけて行く場合には、糸満方面へ直行するからと、そういうふうに話合つて、父と妹を行かせて、そのまま私は残つていたわけですよ。

四月十二、三日頃、その日は非常に平穏で、戦闘はありませんでした。やはり小銃弾はちよいちよい飛んでくるんだが、艦砲や野砲の弾は飛んでこなくなっているわけなんです。迫撃砲は私たちのいる方とび越えて、ときどき遠くへ落ちていました。そういうするうちに、日本軍がどうつと私たちの壕に入つて来ました。夜、大勢の軍隊が住民の自然壕に入りこんできたんですよ。その夜遅く、斬込み隊だと云つて、さかんに準備して、出て行つたんですが、翌朝、焼けどしている者やら不具になつている者やら、ほとんどが怪我して帰つてきたんです。その人数はほんの僅かなんです。

その晩、米軍のものすごい迫撃砲が浦添城址におちてきたわけなんです。ほとんど迫撃砲だったんですが、機銃弾も夜が明けるまで鳴っていました。そこで生き残つた日本軍は結集して、島尻の方へ下がつたわけでした。

日本軍が下がつて二、三日してから、別の二回目の部隊が入つてきたんです。その翌日の昼間、浦添城址は馬乗りされたわけですよ。たしか四月十四、五日(?)だったと思います。

その一带には三つか四つの自然壕があります。そのときに、そのへん全部の壕は米軍にやられたんじゃないかと思ひます。私たちの入っている壕も、何かあの、たしかダイナマイトを束ねたヤツを、三回投げ込まれたんですよ。それが壕の中で爆発して、石がどんど

す。

いよいよ米軍が上陸して、壕生活するようになってから、役場の壕に移つて、ただ待機している恰好で、なんにもなすことがないわけなんです。その中間で、役場を首里の方に移したことがあるんですよ。当時の比嘉村長さんと一緒に、首里の平良の橋の近くの壕に形式的に移したわけですよ。書類は持つて行かなかつたので、あのとき私は一人でこっちの壕に帰つてきて、書類の番をしておつたんです。各役員の方たちも、来ては帰り来ては帰りしているうちに、とうとう私一人になってしまつたわけですよ。

誰もこなくなっているし、敵は近くまできているという情報なので、これじやいかなと思ひ、父と妹を浦添城址においておつたもんだから、ちよつと飛行機もとばない夜明けの時間に、書類に火をつけて、そのまま城址の方へ行つたわけですよ。

そして父たちと合流して、壕生活を一緒におつたわけですよ。四月十日頃か、当山の近くに米軍がきておるわけですよ。米軍が昼間は嘉敷をすきてくるわけですよ。夜はずつと下がつていきますが、当山を越えて城址の下の川べりまでもくるわけですよ。

だからそこに駐屯している日本軍が、もうじき決戦だから住民は邪魔だから、下がらなさい下がらなさいと、頻りに言うもんだから父と妹は、私に南部へ下がるんだがお前はどうかと、相談をもちかけたわけですよ。

私は一人でも残る決意だったので、引止めた方がいいとは限らないし、じや下がるんだつたら、一応首里まで行つて、首里から裏路を通つて、糸満方面へ行きなさいと話してあつたんです。そのとき

ん落ちるんですね。一回目に、私はちよつと奥の壁の曲り角におつたもんだから、ものすごい爆風がびしやんときて、耳鳴りがするわけなんです。その直後に、どろんと、岩が落ちたわけですよ。その落盤で大勢の住民や兵隊が一度に下敷になつてしまつて、一声も発しないで、もうそのままです。落ちた量がどのくらいだったか、薄暗いもんだからよく判らないし、それどころではなかつたですね。それから続いて二回、だんだん奥の方へ爆弾が投げられて、石がどんどん落ちてくるんです。

そこには兵隊と住民がぎっしりしていましたから、ほとんど全部埋められたわけなんです。そして壕の入口の方は塞がってしまった。三回で米軍が引揚げて行つて、その晩になつて、生き残つている兵隊たちも一緒に石をどける作業をして、ちよつと人が這つて出られるくらいの穴があげられました。そこから出てきた人たちは、あれだけの人数がたつたこれだけになったのかと思ひぐらい、四、五十名ぐらしか残つてないわけですよ。兵隊たち黙つて、さあツと前の方へ下りて、撤退していきましました。

で、そこに残された住民は、ほとんどが仲間の人たちで、いろいろと私に相談するんですよ。あんたが下がるなら私たちも下がるけれど、どつちがいいか、どうしたらいいか、などと。私はどうせ死ぬなら浦添で死んだ方がいいと思つていたので、下がらないで残るといったら、みんなは残るんだつたらみんな一緒に残ろうというこゝとになつたわけですよ。

その翌日、外を覗いたら、二、三人のアメリカ兵が壕の前を歩いているんですよ。こつちとしては、別に弾は打ちこまないし、な

にもしないようだったから、ほっとしてそのままにしておいたら、その翌日、朝から手榴弾を何十発と投げ込まれました。だけど、投げ込まれても、ほとんどが奥の方について、私たち男三人は入口に近い方にいましたが、壕の中はまがりくねっているのです、弾は壁に当たって炸裂しても、みんな無事でした。

その後、米軍はみんな死だんものと思ったのか、入ってきたわけですよ。ちょうど米軍は銃を構えて入ってきたのに、私とぼつたり顔が合ってしまったわけですよ。合ったら、米軍は慌てて壁の方に銃をぶつ放して、すぐ引下がったわけですよ。

それから「デテコイ、デテコイ」と言っていました。ちょうど私の側に、宮城さんといって仲間(字)の人で今も健在ですが、支那事変にも行ったことがあり軍用保護係りをしている人ですが、その宮城さんがいて、私は相談をもちかけたんです。危険だが、出た方がいいかもしれない、ということになり、そこで私は決心して、じや一応私が出るから、私が殺られなかったら、あなたも出てきなさい、ということになったんです。ところが、もう一人の中城の防衛隊が、反対して、絶対に出るなと言って、今に生皮を剥がれるからと引止めるわけです。

私はもう決心していましたから、いいよ、私がやられたら君たちは出るな、と出て行ったわけですよ。

ちょうど米軍が銃を構えておるもんだから、一応私は手をあげて出て行って、そしたら、その米軍がまだおるだろうと、訊いたんです。私はハワイ生まれで一才言葉が通じようもんだから、ああ後二人おると答えたら、じゃつれてこいというもんだからですね、私

くことになっておって、その中に組まれておったんだが、あとで私一人引っぱり出されてあなたは残ってくれと、残されたわけです。

これから戦争するんじゃない、沖縄の人をみんな助けて集める仕事をしている、わしはMGであって兵隊じゃないよと、一人のアメリカ人が話すわけなんです。銃は持っているがMGのマークをつけた服を着ていました。前線から住民を助けるのに協力してくれないか、もしあなたがイヤであれば仕方がないとおったもんだから、ちょっと私は返辞に困ったわけですね。どういう事情があってそんなことをするのか理解できなかったし、女子供と一緒にけば安全だなどというところは頭にあるわけなんです。疑問をもつておって、返辞しなかったもんだから、じゃあ今日一日こっちに待って、イヤだったら帰すからと、待たされたときにですね、収容所のそばに住民を守る憲兵隊があって、そこへつれて行かれたわけですよ。

そこでは、あなたの寝台はこれだよ、そこに寝なさいといって、食事も兵隊と一緒に一個一個同じものを、野外にある箱型のトラックから貰いに行つて、畦道に坐って食べるんですよ。そうした間も、MGはずっと私につきまきりです。そして翌朝、どうするか、わしらのキャンプで仕事をするかと訊かれ、どうせ沖縄の人を助けるんだつたらさうしようと私は答えて、そして彼は喜んでですね。

それから私はMGと一緒に、一応大山を前線収容所にして、その当時はまだ首里では戦闘をやっていましたから、那覇と首里の間あ

はまた壕に戻って呼びに行ったんです。私は宮城という人を呼び出して、もう一人はと訊いたら、あれは自決したよということでした。たしかに防衛隊の彼は手榴弾を持っていたが、やり方がまずかったのか、すでに死にそうにうんうん唸っているんですよ。

それから、みんな出されて、身体検査されて後、一人の米兵が前は言葉ができませんでした、というもんだから、一寸は話せると。どこで習ったのか、どこで覚えたのか、と訊きよったので、ハワイ生まれだということの説明から、そんなことよりみんな三日も飲まず食わずだから水を飲ませてくれないかと頼んだわけです。すると、ああそうか、といってそこに転がっている友軍の飯盒を持って行って、一人の米兵が水を汲んできて、私に飲ましたわけです。私は少し飲んでから、みんなに大丈夫だから飲みなさいとすすめたら、みんな「ワンニン、ワンニン」して、欲しがって、喜んで水を飲むもんだから、米兵たちは面白がってですね。二、三名で駄足で汲んできては、みんなに水を飲ましていました。

それから、最初につれられて行った所は、大山です。そこは前線収容所になっていました。女子供はそこに入れて、私と宮城と茂夫という怪我している青年三名は、喜友名(ジョンナー)に行つたんです。PWキャンプがあつて、そこで私は三日間の取調べを受けて、軍隊にいなかったかどうかということで、宮城君は兵籍があつたもんだから残されて、私は兵籍がないもんだから、そのまま帰されたわけです。

みんなと私は一緒になって、そこは仮収容所で、つきつきと入ってくる捕虜を後方に送つておったわけです。私もユザの蒲原(かまはら)に行

たりまで行って、まわっておったんですがね。ちょうど末吉の手前まで、前のボタンール工場のあつた安謝(あじや) (旧真和志村)の方から入つて、錦刈(ぬかる) (同) から、どんなに住民を探しに出掛けたわけです。五月六日に、住民が集団で撤退した場所があるんですが、そして日本軍が総攻撃をしたということを聞いたことがあります。そのときに私は大山で、MGからもしわしが起しにきたら、何も持たずにわしについてこいよ、トラックが待っておるから、と言つたもんだから、そのときは理由が判らなかつたが、あとでそのとき総攻撃があつたということでした。

またその後で、那覇方面でもすごい斬込み隊の攻撃があつたそうですね。米軍が話しておつたですがね。日本軍と市街戦をやつたとき、敵(日本軍)は約四万の人の死傷者を出したといつておつたです。それがすんだ頃、首里は撤退しはじめたんです。そのことが終つて三日目には、私は那覇に入っていました。那覇には米兵の死体は片付けてあつて、日本軍の死体だけがあつたことに転がっていました。住民の死体はほとんど見あたりませんでした。

それから約一週間は大山の方でぶらぶらしておつたんですが、首里が完全に撤退した後で、急に活気付いて、私たちは二手に分かれて、一方は首里の方へ、私たちは那覇を突っ切つて、垣花(かまのはな) (那覇港の南岸地帯)の方へ向かつたわけです。そのときはもう浮橋になつていて、浮橋を渡つて行きましたが、その頃から住民を見かけたわけです。

住民を集めては送り集めては送りしていたんですが、MGと私は

いつも一緒に、兵隊がはじめに見つけて、この壕とあの壕にいますという事になって、後でそこへ行行って私がいわゆる宣撫するわけですよ。これはね、日本語でやったんじやダメで、沖縄口でやってくれていうんです。それで私はマイクをもって、壕に向かって呼び出しするんですが、なかなか出てこないんですよ。

なかなか出てこないんだから、最初MPの兵隊が入って、次にMGの兵隊が入って、三番目に私が壕の中に入って行ってですね。中には七、八名、大きい壕になると二、三十名もおるわけなんです。それで私は沖縄口で話合うわけですよ。ところが中には、私に向かかって、いい若いもんがスパイなんかやっつて、とか何とかさんさん悪口をいうんですよ。でも彼等は外のこととは判らないんだからと思って、我慢して、なんとしても一人でも救えたらと願って話すわけですよ。そうすると、中にはじゃあ誰か外を見てきてごらんと行って、ああそれでもいいよと、私と一緒に外を見てみようとして出ると、米軍がおるでしょう、でも相手が何もいないもんだから、まぢがいなくみんな捕虜になっておるのかと訊くので、まぢがいな、私もつかまって捕虜になって、沖縄の人を探しておるんだと、そういうふうにご話合ってますね、この壕あの壕とつれ出しをやったわけです。

その頃からずっと雨の時期になっておるわけですよ。車が大山から垣花に着くまでに、朝出て午後二時か三時にしか着けないんですよ。雨で道がぬかるみになってですね、中間で、はばったい車をトラックで引張ったり押ししたりして出して、苦勞したわけですよ。それで国場(旧真和志村)の種畜場に、前戦仮收容所を移した

きから日本は絶対だと、日本が負けることはないよ、そういうふうにご教育を受けていたんだと、捕虜にはなるなと、捕虜になって恥をかきよりも自決した方がよいと、そういうふうにご教育を受けていたから、女学生もそれを忠実に守ってやっつたんじゃないかなというふうにご話したわけですよ。憲兵隊は考えられないことだと頭を振っておったですよ。

それから、いろんな悪い事件もあつたですよ。やはり憲兵の監視が行き届かないわけですよ。というのは、強姦事件がたびたびあつたようです。現に、CIDが調べておるときに、私も呼ばれたんだが、この事件は本当か嘘かはっきり尋ねてくれと、……十九歳になる娘が十九名の米兵に強姦されたと、CIDは疑っているわけなんです。証人も本人もそういうのが、本人にもう一度たしかめてくれと、CIDが、十九名もアメリカ人を受けたというのに、こんなにちゃんとしておるが、どんなふうだったかはっきりきいてくれと。そこで私が訊いたら、たしかにそうだと。同じ墓でつかまつた他の人が、その娘に絶対に動くな抵抗したら殺されるからと、娘が墓の中に引張りこまれるとき、声をかけたらしいですね。その言葉を娘はそのまま守ったわけでしょうね。それで殴られもせず傷は受けなかったと、娘がそんなふうにご話したわけですよ。声をかけた人は、墓の外で、米兵が入れ替り立ち替りするのを見ていたわけですよ。

また別の事件では、中年の女の人です。真ッ裸になって毛布でくるめられたまま担ぎ込まれていました。どうしたかと米兵にきいたら、強姦されたと言っていました。その女の方は意識不明に

わけです。沖縄の人は私をまじえて、七、八名ぐらいおつたですがね。

国場に移つてからは、島尻の戦線はものすごい勢いでさがつておるわけなんです。そのときからは、夜昼となく、夜中でも前線の兵隊が住民を見つけた場合は連絡があつて、連絡があつたらこちらに車に乗つてつれ出しに行くことになっていたわけですよ。

国場から豊見城(村)の方を通つて行つたわけですが、住民が多いのは糸満街道ですね。あの方面は住民がものすごく多かつたですね。二手にも三手にも別れて、住民をつれ出しに行つたわけですよ。

敗戦間際になってから、あと一週間というときじゃなかったかと思いますが、糸満の方で大勢の住民を兵隊が困つていと聞いて、私たちも行つたんですが、あんまり住民が多いもんで、伊良波(豊見城村)の所に、あそここの広場に、もう一つ收容所をあらたにもうけて、杭を簡単に打つて鉄条網なんかは三本ぐらい廻して、そこに收容したんです。そこに收容された人たちはすぐ前の海からですね、海上トラックで沖に泊つているLSDなんかは、そのまま乗せていきました。あとで逢つた人なんかは、金武(村)の方、古知屋(旧金武村)へ行つていたんです。

そうした仕事をしている間に、次のようなことがありましたね。私が目撃したわけじゃないが、私は憲兵隊に呼ばれていると訊かれたことなんですよ。女学生が折角トラックに乗せてから自決したが、それはどういう気持ちからかと、質問を受けたわけですよ。私もそれには返答に困つてしまつて、兎に角、教育はみんな小さいと

なつていました。息はしていたが、動こうともしませんでした。そして翌日、死んだんですがね。どういつた原因で死んだのか、それも判らないわけですよ。

私が接したのはその二件ですが、それ以外にも話はずいぶん聞いたんです。その当時はあることだろうと、そうしか考えてなかったです。戦闘が入り乱れて人の心もすさんでいましたからね。

宣撫で苦勞したといえは、いつでも最初は手榴弾を投げられやしないかと、不安やら、こわかつたですね。津嘉山で、三十分ぐらい交渉しても出てくれないことがありました。壕の中には七、八名入つていましたが、もう子供と仲良くなるほかはないと考えて、四、五歳ぐらいの子供をすかしてだんだん引張り出したわけですよ。すると母親が追つてきて、壕の入口まで来たとき、まず出てごらん、まず出てごらんと、母親と一緒にいやるのをそのまま押し出して、外で話すことにしたら、しめたもんです。納得して貰うと、その母親が壕の中のみんなを呼んで、助け出すことになりましたがね。

一応前線の收容する仕事が終わつて、種畜場まで帰つてきて、そこで一週間ぐらい食糧など整理したりしてトラックで送り出していきました。その仕事も終つて、そこではじめて住民が集まっているところへ帰すが、どこへ行きたいかと、MGに訊かれたわけですよ。

私は出身地の村は浦添であるといつたら、米軍は地図を調べて、浦添には住民はいないから、石川あたりには住民が多いが、そこにしたらと言っていました。私はどこでもいいと思ひ、黙つていたんです。同じ仕事をしている私たちの仲間も、具志川の人が多かつたもんだから、それぞれ思ひ思いに、高江洲(具志川村)へ行くといい

う人もいるし、前原へ行くという人もいるし、また塩屋(同)という所に行くという人もいました。どこもまだ一度も行ったことがなく、私は迷ってしまいました。それじゃ前原はよさそうだから、そこへ行ったらどうかと米兵がいうもんだから、私はそこへ決めて行ったわけです。

私が前原へ行ったら、偶然、嘉数の壕から出した人と逢い、また大謝名の天久さんなどにも逢ったんです。それから後は、のんびりと、前原で落着いてずっと生活しておったんですが、そのうちそこへパースという大尉がきたんです。その人は設営隊長でした。その人の指導のもとに、住民をふたたび移動させて生活するところを設営することになったわけです。その人は私に、糸満に設営するためには、どうしてもあんたが必要だからというもんだから、私は断るわけにもいかず、また引張られて行ったわけです。むこうに引張られて行ったのは、戦争が終って翌年の十一月頃でした。

で、糸満の方へ行って、工務課というのを作ってですね、むこうで私は働いたわけです。そのうち浦添にも移動がはじまったというのを私は聞いたもんだから、帰りたいしもういらないわけですよ。それでいろいろと設営隊長に話して自分の部落に行かしてくれと頼んだが、聞き入れられませんでした。

その当時は、島尻あたりに全く住民がいなくなっているの、中部から住民を移動させるために、住宅の建設をするのが先決問題でした。最初はテントですが、つきつき規格家を作ったわけです。

糸満の場合は、古知屋の方から糸満出身の若い青年を相当人数つけてきていました。まず地ならしをするための基礎工事をしまし

いもんだから、ちょっと言葉をかけてそのままですよ、こっちはしょっちゅう行ったりきたりしているもんだから……。一回顔を会わした場合もあるし、あるいはその人たちが後方に送られるときやたたび逢った人もいるしですね。自分の父は、中城の方にいるというのを人から聞いて、私はぜひ逢いたいからと米軍にお願いしたら、とうとうじやあ自分が行ってきてあげようと少佐がですね、自ら車を運転して行ってくれたんですが、訪ねたらちよどその前の日に古知屋の方へ移動しておったということでした。それで、しまったと思っただけ。それでも元氣だということが判って、自分の父も少しは英語が話せるわけで、むこうで班長をしているというふうなこと聞いていました。

強姦事件で、犯人が白人だったか黒人だったかは、聞きそびれましたが、ただ私たちが前線の方へ行く場合は、MGの兵隊とMPが私にどこいってもつきつきりです。そのとき黒人の兵隊が多い場合には緊張してよく注意しよったですよ。一歩だつてわしらから離れるなど、私にも注意しよったですね。

黒人はたいがいが運転手で弾薬輸送などしているようでした。

私は妻子を内地に疎開させて、母と弟は国頭の方に行かせて、家に残っていたのは、私と父と妹でした。で、あとで父と妹は島尻へ行きたいというもんだから、行かせたわけです。父と妹は南部で、砲弾が激しいもんだから、別々になったそうです。そして古知屋の収容所で一緒にあったわけです。家族はみんな元氣で生き残って、戦争の犠牲にはなりませんでした。

た。糸満には石垣が多くてですね。それをどけてならすのに、ブルドーザーを使うわけです。ブルを使うのはみんな未経験者でしたが、ある程度の要領を教えて貰ったら、二、三日したらみんなすぐ動かし方を覚えて、五台であそこを平地にして村を建てはじめたわけです。

糸満から兼城までをひとまとめにして、三和村(戦後、真壁・喜屋武・摩文仁の三村の人口が戦前のその一村の人口にも満たなかった。そこで昭和二十一年四月四日三村合併して三和村とした。)にいる人たちをそこへ収容したわけです。そしてようやく設営隊長が帰るといことが決まった頃、私は急いで浦添にとんで帰ってきてですね、こちらの工務に入りましたが、そのときはもう住民も相当入っていました。

#### 補足

壕から住民を引出した後、収容所につれてくるまでは、みんなから疑いの目で見られているようでした。だから、私はできるだけ自分の名前も出身地もあかささないわけです。どこの人であるということも、もうしようがない場合だけ言いました。なかなか自分の身許ははつきりさせないわけです。どうしても出ない人のときは、私も浦添の人であると、同じくつかまったんだけど、住民を助けて集めているんだと、そういうふうにしよったですね。

その仕事をしている間に、ときどき浦添の人たちとも逢ったわけです。前村長の又吉さんなんかも古波蔵(旧真和志村)の収容所で逢いました。その当時は、同村の人たちに逢っても、こっちは忙し

#### 宮城 篤三(三十三歳) 兵事主任

子供は六名おりました。一応召集は終わったもんだから、役場の仕事は知念君に頼んでですね。三日間は私、国頭まで行ってくるからと、家族をつれて国頭に行きましたが、そのままずっと国頭にいました。出発は三月二十五日でした。

私は妻と子供たち、八名で、学校の荷車をかりてきて、食糧といつてもあの時分からは米はないですから、味噌とか簡単な寝具をもつて、子供らは荷車に乗せて、夜だけ歩いて、昼は山の中に隠れて、四日目に北部の辺野喜(国頭村)につきました。

最初、私らは現在の一号線つたいに行つて、三月二十六日には恩納の山で、二十七日の晩に、はじめて照明弾が船から上がるのを見ました。

辺野喜には、浦添からは百名ぐらいきていました。私は辺野喜について、子供らを置いて翌日一人で帰るつもりでしたが、その晩、空襲にあい、部落の大多数は焼けてしまいました。だから私らは着いた翌日焼け出されてしまい、焼けた芋くずなどを採って、すぐ山の中に隠れたんです。山の中の逃避生活は、これはもう盗人ですね。

山の中に入ってから、一週間ほど経って、辺野喜の部落の下の方に、米軍のキャンプができ、山の中に逃げているものたちは夜になると、食糧を盗みに行きよったですがね。私がいっただきには、番がいて、どうにもできなかつたです。辺野喜の山の中には二十日間ぐらいいましたが、野放しになった山羊など盗んできて、殺して

食べたりしました。また避難小屋からも食糧をときどき盗んだりしました。

國頭の山の頂には、「ナガニミチ」といって、昔から首里まで通れる道があって、私らはその山道を通って南に向かい、東村の方まで行ったわけです。川田（東村）の奥の山で、雨が激しいので、私とめるのも聞かずに、山越えしようとして、よその母親とおんぶしている子供と手を引いている子供、その三人が足をとられて水の中へ流されるのを見ましたがね。多分、三人は死んだでしょう。

一週間以上たつてから、東村の有銘の山奥の、宇橋山うしはしにきて、そこに子供らを隠して、反対の源河（羽地村）に通って甘藷をあさっていました。ちょうどそのときに私は、日本軍の宣伝が面白いもので、アメリカ人は夜はものが見えなくなるといふことだったので、夜行って安心して甘藷をあさっているときに、不意にアメリカ人につかまってしまうんですね。山原のウタキの祠ほくらに入れられて、二十メートルほど離れた所で米軍が十名ばかりで雑談しながら私を監視しておつたんです。私は隙をみてそこから這って出て、逃げて行ったら、ちょうど行つたところにまた歩哨が立っていて、突然ぶつかってしまったって、歩哨とですね。アメリカ人も驚いてしまって、あめと言つて後に倒れて、私も驚いて、側にどけたら、そのはずみで田圃の中に落ちてしまつてですね。それからもう夢中で田圃の中を十歩ばかり進んだら、パンとやられて、背中から弾をうちこまれてしまつて、弾は背中から左腕に盲管めくらんしたんです。それからなんとか逃げたんですが、そのときから食糧とりに行け

そこであらうと八月十五日の天皇陛下下の玉音放送を聞きましたがね。家族は呉我こが（同村）という部落にいたそうです。

その後、稲嶺（同村）で、子供らと一緒に喜名さんがCPしている近辺を越境して、福山に、知人を探して子供らをつれて行きました。福山で七歳になる長男が栄養失調で死にました。そして野嵩に宜野湾の人たちがいるというもんだから、最初は一人で訪ねて、それから家族をつれてきました。そこにきてからは食糧にも不自由しませんでした。

註、稲嶺から福山、福山から野嵩へ越境することは、かなり困難であるが、これに類似することが他に話されるので、ここでは割愛した。

#### 比嘉正育（二十八歳） 台湾引揚

私は敗戦になって、台湾から内地へ行きました。沖縄に引揚げてきたのが二十一年の十一月でした。

私が帰ってきたときは、村はまだ廢墟でした。戦争でたつた一軒残った浦添小学校の、昭和八年頃建てられたコンクリートの建物があつたところ弾痕をとどめて少し崩れて建っているのが目につきました。

その前の役場のあつた近くに、私はトラックからおろされてですね、迎えにきた親戚は三名でしたがね。兄弟は元氣かと訊いたら、いや八名兄弟のうち、長男と四男は生き残っていると、両親は戦争でなくなっていました。いないものと思つていた長男と四男は生き

なくなつて、有銘に引返したんですが、食糧に非常に困まりました。妻の乳はぜんぜん出ないし、乳香子は栄養失調でオオシツタイ（旧羽地村）という所で死にました。有銘では、ヘゴの芯やソテツも食べましたが、主にチイッパー（ツワブキ）、ンジャナ（ホンバワダン）、カンダバー（サツマイモの葉）、かたつむり、山イチゴなどを取つて、飢えをしのいだんです。

背中の傷は、はじめは腐つて、蛆が湧いておつたんですが、名護（町）の比嘉さんという方が嘉津宇岳の軍医をしていると聞いていましたから、探して行つて、大川（久志村）の山の中に訪ねてですね、一部分を切り取つて貰いました。その後、傷は放つておいたら、自然によりやく癒えてきたもんだから、私はまた少しづつ甘藷あさりをやつたんです。ときには、段段山の畑から、ちんぬく（サトイモ）等を取つて食べました。

有銘にいるとき、雨ばかり降つていましたが、じつとしていると、逃げる元氣もなかつたんですが、米軍がきてですね、羽地村の田井等に降りるとしきりに手真似しました。私らは米軍について山を降りて行きました。田井等に降りてからは、すぐ収容所につれて行かれ、私は米軍の仕事させられました。軍の命令で今帰仁村の親泊に一月半ばかりおりました。ある日、米軍に男三名つられて行つてですね、拳銃を出して私らに、そこに集めてある癩病患者を殺せと命じましたが、さすがに私らは拒否しました。私らは帰されましたが、後はどうなったか判りません。その後、私はそこでマリアにかかつてしまつてですね。一週間ばかり四十度を越す熱が出て、そしてそこから、真喜屋（羽地村）の軍病院に入れられ、

残っているということでした。

降り立ったときに感じたことは、昔の家は一軒もないということでした。ただ一角に、テントが幾つかあり、それから小さい規格住宅、そんな小屋が点々とあるだけでした。

ちようどうちの長男がCPをしておつたんですがね。CPしている人は、必ず規格住宅に入つておつたです。その規格住宅には、半分は兄貴が半分は弟が入つておつたが、私も一応はそこに入れて貰いました。私は妻と二人の引揚げでしたが、そこで一緒に苦しい生活をしました。妻は妊娠していました。

約二週間してから、なんとしても家から造ろうと決心してですね。私は城間くぐくまの部隊の近くへ行つて、その塵捨て場あさりをしてですね。毎日毎日、板切れなどを拾ってきたんです。やつと四畳半ほどの家が造られるんじゃないかと思うほど集めました。柱になる木が見つからなかつたんですが、ちようどう友達に柱になる木を持っていて、四本くれたもんだから、それから毎日なれない大工をして、じきに簡単な家を建てたわけです。こんどは服やオシメの問題、それも塵捨て場から取入れるのはなかつたです。みんなそうでしたし、塵捨て場にはいろんな廢品が捨ててありました。で私は、塵捨て場にテントの切れっぱしなどを探しに出掛け、毎日通っているうちにちようどうテントの切れっぱしを適当に集めることができ、そうして家に落着けるようになったら、ちようどう子供が生まれただけでした。

私は大阪から帰るときに、荷物はあまり持っていませんでした。ただ想像で、沖縄は紙と白墨が不自由しているだろうと考え、むこ



りの闇市で買って、持ってきていました。荷物からすると、白紙と白墨が多かったです。それは全部役場に寄付したんです。それでその返礼として特別配給を貰いましたね、それはニンジンとジャガイモの乾燥したもので、一斗籠に入ったものでした。あのときは、なんとも嬉しかったですね、食物が少ないときですから。

最初、船で引揚げてきて、上陸したとき、ちょうど港の収容所の前の道路を、グレーダーでもって道の敷きならしをしていました。それを見てですね、これは日本が負けたのも無理はなかったと、すぐその時点で感じましたね。それから浦添にきたら一本の木も草もないし、住んでおった浦添城址の北側ですね、そこには大人が六、七名でとりまくような幹の、松の太木があつて、うっそうと茂っておったんですが、それがぜんぜんない。それで見ると影もない風景なので、なんでこんなところへ帰ってきたかなあと、そんなふうに感じました。

村が遺骨拾集したのは、たしか一九四七年になってからでした。カマスに入れてですね、部落内や畑の中やあちこちから、全村民総出して、遺骨を集めました。城址の中の浦和の塔に、自然洞窟があるんですが、そこに納骨堂を作っておさめたんです。六十五年に、遺骨を焼いて灰にすることになったとき、カマスで百三十八袋ありました。トラック三台ですね。それは拾集できたところだけのものです。落盤などして拾集できないところはそのままなので、納骨堂に安置されてるのが五千余柱ですから、実際の死者はもっと多かったことでしょう。拾集できなかったところが、浦添には、三か所あるといわれています。沢峠に一つ、前田の方にも一つ……。

## 仲間(浦添村)

星 雅彦

時 一九六九年十月十四日

場所 字仲間 公民館

氏 名 現 住 所

宮 城 盛 善  
与 座 保 孝  
銘 莉 ツル  
宮 城 高 進



## 解説

新馬調教官だった宮城盛善氏の体験談は、短く、あまりにも整理されすぎていて、簡単すぎたわけであるが、他日浦添村役所で知念明氏から聴取したときの、捕虜になるときの状況と全く一致したので、そうした実証的な裏付けとしての意味があった。

与座保孝氏の特徴は、食糧難の戦時中、精米業をしていたということである。しかも、住民にとっても軍人にとっても主食である米は、何にも替えがたいほど重要なものであったが、いざ身の危険となると、当然ながら命には替えられず、米を顧みないという情景が出てくるのである。村長と一緒に大事な配給米を守りつつけるが、とうとう捨てて、逃げる話がある。また、戦場で日本軍が米を運ぶよう強要しながら、与座氏が苦勞して運んで行った先方では全く

それに無関心で、責任をもって受取ろうとしない話がある。それは当時の軍部の無計画性の一端を露呈してもいようが、敗北にあがいて、支離滅裂になっていくことが窺い知れるのである。そして与座氏が死を決して捕虜になって行くとき、大事に持ち歩いてきた一升の米を捨てて出て行ったということは、まぎれもなく絶望感を意味していたであろう。極限的な状況は、戦争体験者の中に随所にあるが、銘莉ツルさんの、壕の中で水が欲しいばかりに、とうとう小便を溜めて子供に飲ませたという話は、子供への愛情と、生きようとする極限的な行為であろう。

この仲間での取材の中では、宮城高進氏の話が、もっとも詳しく、かつドラマチックであった。当時十六歳だったというが、その記憶力には驚嘆するものがある。しかしそれには、一方に、亡くなられた父親の手帳のメモからあずかるものが多くあって、記憶を支えているのであろう。死の直前まで簡単にメモされてあるその手帳には、当時の農村の供出の種類や数量などが記されており、それは別な面から貴重な資料となるが、ここでは割愛し、戦火の中の日記のごく一部を転載させて貰った。なお宮城高進氏の淡淡とした談話の中には、記録文学的な要素というか、さまざまな真実が見事に表現されていたように思われる。それは少年の目立たぬ勇敢さ、繊細な感情、肉親愛、哀しみ等である。

宮 城 盛 善 (二十五歳) 軍 属

当時、沖縄の軍属というのは、軍の作業員みたいなようなもので